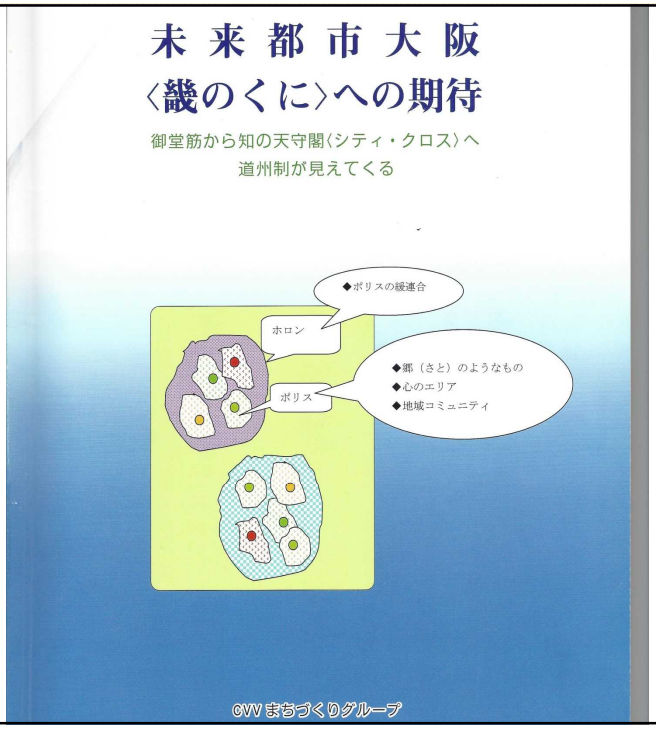
2016.3.24　T.TANIHIRA

KAISON企画

- KAISONとは　　P8
- 塊村
- 開村

電通 ●〇部長　中尾順二

- (株)KAISON
- KAISON企画研究所



ホロニック・ネットワーク

- P5

- ＜畿のくに＞　から　＜西宮してぃい＞

事例研究

- 淡路ホロン
- 紀伊山地ホロンの天川村ポリス
- そして　西宮ポリス＝＞
- P26　　西宮ホロンと見なして考察

勝手にKAISON　　P9

- Ⅰ。８つの地域に区分
- Ⅱ。地域の遺伝子を探す
- Ⅲ。地区のまちづくりコンセプト
- Ⅳ。勝手にKAISON企画の開発例

あとがき

- 具体的な提案不足など、未完状態
- KAINSON企画構想、7つの区分け
  は故中尾氏の創案

残されたメンバーが氏の意向を外さずに継承できるとは思えない

この冊子を基本コンセプトと捉え、
色を出し､具体化し実践していくのは、
西宮市民である。

（付録:提言）

西宮人　ホロンへの道

- 下駄履き保育所（義務育児）、特養
- 無電柱化
- 海辺の緑化　津波堤
- （アサヒビール跡）＆
- すっきゃねん西宮　NPO　検定
- 長老委員会

御参考　　過去の発表事例です。

にしのみやしてぃい

KAISON 企画書

CVV まちづくりグループ

２０１０．０９．３０

目次

まえがき

まちづくりの理念
　縮小都市化現象は世界の潮流
　新しい都市のカタチ
　都市の自立は水とエネルギーと食料の自給自足、そしてコミュニケーション
　都市文化を育む精神の継承

KAISON 企画

勝手に KAISON
　Ⅰ地域の区分
　Ⅱ各地の遺伝子候補
　Ⅲ　８地区のまちづくりコンセプト＜理念＞
　　山口・塩瀬地域のまちづくりコンセプト例
　　甲山地域のまちづくりコンセプト例
　　甲東地域のまちづくりコンセプト例
　　広田・夙川地域のまちづくりコンセプト例
　　西宮・津門地域のまちづくりコンセプト例
　　甲子園・鳴尾地域のまちづくりコンセプト例
　　海岸通地域のまちづくりコンセプト例
　　西宮北口特区のまちづくりコンセプト例
　Ⅳ 勝手に KAISON 企画の開発例
　　山口、塩瀬地域のエリア・コンセプト例
　　甲山地域のまちづくりコンセプト例
　　甲東地区のまちづくりコンセプト例
　　広田･夙川地域のまちづくりコンセプト例
　　西宮・津門地域のエリア・コンセプト例
　　瓦木・甲子園・鳴尾地区エリア・コンセプト例
　　海岸通り地域のエリア・コンセプト例
　　西宮北口特区のまちづくりコンセプト例

あとがき

まえがき

西宮市は、人口が急増しており、マンション開発が増加している。それにともない、乱開発、環境破壊、学校不足、上下水道の対応など新たな問題が発生している。

戸建によるエリア開発など、文教住宅都市・西宮にふさわしい都市の整備について、KAISON（塊村）をキーワードとした整備手法を提案する。

まちづくりの理念

「私たちが現在住んでいる場所が、文化そのものだということを再認識するべきである。文化会館や美術館だけが、文化の象徴であるのではなく、住んでいる環境を作ることそのものが芸術の表現となりうるのである。わが国は激しい近代化によって、文化遺産としての集落を失った。これからでも保存は重要であるし、新しいまちづくりには、より重要な課題である。

都市は、さまざまなかたちで、場所がもっている力（自然の潜在力）を活用して、成立している。事物は、あるべき場所に還ることによって、本来のあるべき姿を取り戻す。」（原広司・集落への旅から）

縮小都市化現象は、世界の潮流

今欧米諸国では、人口１０万以上の都市の２５％が縮小に向かっている。その主要な原因は、重厚長大型産業の衰退、少子化による人口減少である。2005年頃から世界各地で縮小都市をテーマにシンポジュウムが開催され、縮小都市の＜カタチ＞について研究されている。わが国でも、夕張市に続く都市の出現を杞憂する声を聞くが、長期的に観て都市が縮小に転じることは誰しも理解出来ることである。

わが国では2008年５月、地方分権改革推進委員会・第一次勧告の中で生活者の視点に立つ＜地方政府の確立＞、地方が主役の国づくりについて

１、　地方にある個性豊かな資源を掘り起こす

２、　その資源を自立した地方の創意工夫によって多様に活用する、分権型社会こそが強さを発揮する

３、　自立した地方が連携しつつ、地域の個性と地域に個有の資源を結びつける事で魅力を高める

とした。

関連して2010年６月２８日政府が、地域主権戦略大綱を発表した。

１、国のひも付き補助金を一括交付金に改める。

２、国の出先機関を抜本的に改革する。

３、国の法令で自治体の仕事を細かく縛る「義務付け･枠付け」を見直す。

４、都道府県の権限を市町村に移す

としている。

何れも国の権限や関与を小さくし、地方の自由裁量を拡大する方向示している。

即ち地方が主役の国づくりは、これまでのような成長を前提とした、フルセ

ット型の地方政治ではなく、自立した地方が連携し（共助の精神）、その規模や施設の数を競うのではなく、個性を重視する行政の方向を示唆している。
　生活者が都市に求めることは、都市の成熟にしたがって変化する。地方分権改革を進めながら地域間格差を縮小させている世界の国々では＜自立すればするほど連帯する＞という思想がある。競い合うのは個性である。自分が持ち合わせていないものはお互い連携し補いあう。自立は、他人の助けを借りずに独り立ちすることではない。世の中誰もが周囲に支えられ生きている。都市も同じである。フルセット機能を持てない都市はなおのこと、支えあいの構造に持続可能性を探ることになる。

　一方当然、生活者も家族が減り＜我が家＞を、4 LDK から 2 LDK に縮小、併せて大型液晶 TV や車を処分しても、直ちに生活の質の低下、ゆとりある暮らしを放棄することではない。耐久消費財がフルセットで備わっていなくとも、いくらでも創造的な生活を探求する事ができる。…生活のスタイルが重要になる。生活の贅肉を落としスリムになることは、活力の乏しい暮らしとイコールではない。朝起きておいしいコーヒーを楽しみながら FM 放送から流れる音楽を聴いたり、読書をしたりすること、あるいは絵筆をとったり、和歌を詠む暮らしが、退屈で刺激のない暮らしではないことを感じている。
これからのまちづくりには、生活者のこのような視点も必要になる。
　都市は大きくなり過ぎていないか。生活者の欲求は都市の成熟度が増すにしたがって細かく難度も高くなる。従って多様な施策が必要になる。

新しい都市のカタチ
　今の国のカタチは、明治 4 年 7 月 14 日、明治政府が在東京の知藩事（旧藩主）を皇居に集めて命じた廃藩置県を骨格にしている。当時 3 府 302 県あったが、その後 18 年もの長い間、統廃合をくりかえし、明治 22 年（1889 年）3 府 43 県（北海道を除く）の中央政権統治のカタチが出来上がった。
　そして今、再び地方主体の国づくりに変わろうとしている。1923 年、関一大阪市長は、都市に人口が集中し始めると、中央政権的、画一的な統治では、都市の社会的、文化的発展を阻害する要因となる、都市自治は理念の問題であると言っている。それからおよそ 100 年、順調に進めていって欲しいものである。
　私たちは、「未来都市大阪＜畿のくに＞への期待」CVV 刊の中で、ホロニック・ネットワークという考え方を提案している。
　近畿圏の特徴として大阪、京都、奈良、神戸、和歌山と全く性質を異にする都市が並んでいる。必ずしもひとつの性格ではくくれないものを持っていて、非常に特色のある都市群を形成している。この傾向は阪神間の都市、大阪、尼

崎、西宮，芦屋、神戸にも見られる。あえて共通点を挙げるとすれば、東京（国の権威）への対抗心であろう。ただ、これとてもエネルギーを結集して、ひとつのことを達成しようとするとき、決してうまくいかない。近畿、言葉通り＜都に近いところ＞、1,500 年の歴史を持ち、うち、千年余も政治の中心であった事を誇りに感じている人々は極めて少ない。歴史も未来もない現在的な発想の街になってしまっている。私たちは、これを大阪気質として自他共に認め、あるときは誇りに思い、醒めたものの見方として賢明さの証としていたところもあった。

私たちの提案しているホロンの発想は、大きな意味で＜生きがいや生活マインド＞を同じくする人達が集まって、まとまった意見を発信する。そしてそれらの意見が政治や生活文化の向上に繋がっていく、物を言う＜発言する＞組織が出来ないだろうかと考えた（コミュニケーション復活）。それぞれの地域の＜理念＞をしっかり作り、長い時間をかけてブレナイまちづくりを着実に達成していくという手法を示している。

そこではホロンの役割（市くらいの大きさ）、ポリスの役割（街くらいの大きさ）、個人の役割を、明確にしてその役目を果たす。特に個人の役割が重要で、世界のまちづくり例の中でも、殆どが自分の街づくりに住民が立ち上がっている。当然、一人ひとりが街づくりについて学び、知識を持つ必要がある。私たちの提案するホロニック・ネットワークは、市政を中心におだやかな情報ネットワーク＜絆社会＞で市が成立する。そしてホロン（市）は自立を目指す。

KAISON 企画はこのホロニック・ネットワークを具体的に西宮にブレークダウンしたものである。

都市の自立は水とエネルギーと食料の自給自足、そしてコミュニケーション

未来都市が自立するための基本は、水とエネルギーと食料だと考えている。

○水に関しては、わが国では気候に恵まれ、その豊かさに不足を感じる事は滅多にない。しかしながら世界の水不足は深刻で、今後 20 年以内には最大の危機が来ると予測されている。ロンドン大学・A アラン教授が提唱する＜バーチャル･ウォーター＞という考え方をもとに、地球研（京都大）から＜地球規模の水循環変動ならびに世界の水問題の実態と将来展望＞が発表された。輸入食料を通じて間接的に消費される＜水＞を計量化して水需給を論じたものである。

それによると、穀物、農産物を生産するために使われる水の量や、畜産物では飼料作物を育てるのに必要な水も含めてすべてを数値化した結果、米 1 トン生産するのに水 3.6 トン、大豆で 2.5 トン、小麦で 2 トン、牛肉で 20.6 トン、

豚肉で 5.9 トンとなる。身近な食材に置き換えると牛丼 1 杯で 1,890ℓ 、蕎麦 1 杯で 750ℓ となる。世界は、バーチャル･ウォーター輸入国と輸出国にわかれ、日本は 800 億トンの水輸入国になっている。アメリカの農場の砂漠化や中国黄河の水涸れは、わが国にも深刻な事態になるのである。水は、大変重要なものであるという認識が必要となる。

〇わが国のエネルギーは、水力発電、火力発電、原子力発電が中心であるが、殆どが化石燃料で賄ってきた。ここにきて、地球温暖化問題が発生。エネルギーの体系を考え直す時が来ている。国のエネルギー政策は、原子力発電を中心に、太陽光発電（補助金が出る）の方向に向かっている。これを機会に自治体が主導して水力、太陽光（熱）、風力、潮力、バイオマスなど各エネルギーを研究して、地域の個性に合ったエネルギー生産システムの組み合わせをつくることが必要だと考える。

沖縄県の米軍基地問題は、新たな負担問題が発生する。同様に原子力発電所設置地域に対する負担問題にも発展するであろう。今、この地域(関西)の電力は、福井県、富山県で生産されたものが大半です。今まで通りのような公平な料金で利用できる保障はないかもしれない。すでに太陽光発電の買取価格はすべて電力料金に加算されるようである。杞憂に終わればいいのだが。

〇自給自足の柱は、何と言っても食料である。輸入食品に関して数々の事件が発生。いままでにこれ程、食料の安全、安心を脅かされた事はなかった。
われわれ一人ひとりの食生活について考え直すいい機会だとも思います。
身土不二（地元で獲れる旬の食品や、伝統食が身体に一番良い）少々高値であっても、鮮度の高い、安全な食品を地元で調達できるシステムを作る、そして生活者に対しても啓蒙活動をする必要がある。

以上水、エネルギー、食料のことに触れましたが、もうひとつ大切な事は、人と自然、まちと人、人と人の都市コミュニケーションの問題だと考える。これらが充足していることは、未来社会でも都市力の大きい都市と言えるのではないでしょうか。人の心が纏まりを見せるとき、何かひとつの目標に向かって進んでいるときである。いままでの都市の住民たちは、あらゆる能力を持ちながら、まちづくりに関しては極めて無関心であった。それは、まちに対して具体的に何をすればよいのかが、分からなかったのではないか。だから、行政に向かっていろいろな要求を出すことが、まちづくりに参加しているという意識だったように思える。世界のまちづくりの状況は、住民が主役で行政がサポートするカタチが圧倒的に多い。（知識も高い）

これからの西宮市には、元気で、賢くて、いろいろな経験や専門的知識を持った、手持ち無沙汰の老人が増える。これらの活用が重要になる。

都市文化を育む精神の継承

西宮市は、完成度の高い成熟した街である。古代、百済文化の伝承地であり、門前町、宿場町として栄え、近代は大阪のベッドタウンとして発展してきた。しかしながら、日本の他の都市と同様に近代化の波が押し寄せ、鉄道や橋が出来、道路が出来るごとに、街の遺伝子は失われていった。これからの都市づくりを考えるとき、これら失くした遺伝子を掘り起こし、街に再び命を与えることで、都市の自然な形を呼び戻すことが個性であり、重要なことではないか。それがその土地の一番美しい姿を見ることが出来る。

大震災で阪神間から多くの人達が去ったが、再び阪神間に帰りたいと思う人達が多い。以前からこの地域の人々は、他の地域に移り住みたがらないと言われている。気候風土と都市生活文化が、住み良さを創ってきた。人は住み慣れた土地の都市生活文化に、限りない愛着を感じている。それは、作られたものではなく、育まれたものである。・・・毎日の散歩道にある歴史を感じる大きな木、夏には一息入れる木陰をつくり、秋には沢山の実をつけ、拾って季節を持ち帰る。そして気に入った喫茶店で朝の行事が終わる。そんな街の面影が忘れられないからだ。街の情景は人の心の中に深く浸み込んでいる。阪神間が持つ都市文化は、このような考え方を持つ人びとの圧倒的な支持を得てきた。

都市文化とは、都市を支えてきた人びとの生活のあり方や行動の仕方であり、それらを創りだし流通・消費させる都市のシステムである。
そして、その結晶としての都市文化であり、何よりそれを守り、創り出してきた精神である。阪神間では、それが住民側の視点であったからこそ、震災を経てこの地に残りたいと思う人が多い。
都市の個性と活力の源泉である＜都市文化を創りだす精神＞が重要である。

KAISON 企画

　塊村とは、文化人類学でいう日本の一般的な集落のカタチ。集落の一原型。自然発生的に家屋が集合して塊状の平面形を示す集村をいう。
　KAISON は塊村を止揚して、各戸の開放性、コミュニケーションの良さを蘇らせようとするものである。

○KAISON は、街の遺伝子を持った個性的なエリア・コミュニティーを構成した地域で、開発する地域がもっているライフスタイルに同調して、それをより発展させる。そして街のリードエリアとしての魅力をもちかがやく。
○KAISON は、街の未来を暗示するように街全体に潤いを満たす役割を果たす。街の歴史、伝統をつなぎ、未来への想像力を持つことで美しい街をつくる。
（即ち KAISON とは、未来指向の開発モデル地区。地域のまちづくりコンセプトの核エリアとして、地域のリーダーの役割をもつ。西宮北口が第一号かも知れない。）

KAISON 地区の基本ルール（共助の精神）
１、　地域の＜まちづくりコンセプト＞に沿った開発企画であること。
２、　参入する地域にお役立ちを考えた企画であること。
３、　KAISON エリアは、外庭方式を採用すること。
　　塀に囲まれた内向き庭園ではなく、街に向かって開かれた方式。
４、　各家の庭園を尊重しながらも、各家が出し合って共有する、大きなコミュニケーション庭園が望ましい。
５、　KAISON 指定地区（地区や個人が対象）
　　KAISON 指定地区とは、住民の地区や個人から庭園の見学開放やコミュニケーション場所などの提供の申し出があった場合に設定する。

西宮市の役割
１、　KAISON 企画参加のデベロッパー、地域、個人に対する奨励策
２、　８地域に対して＜まちづくりコンセプト＞に合った施策の実行
３、　KAISON 企画参加の市民活動へのサポート

勝手に KAISON

以下の、地域の区分、各地域の遺伝子探し、まちづくりコンセプト＜理念＞、まちづくりコンセプト例は、各地域に住まう人たちを中心に作るものであるが、わたしたちが勝手に作ったもので、あくまでも参考とすべきものである。

Ⅰ 地域の区分

西宮市は、昭和 38 年以降、＜文教住宅都市・西宮＞のコンセプトに従い、各まちがいままでの暮らしの中で、個性的なライフスタイルを創り上げている。

私たちはそれらを大きく、西宮北口特区と山の地域、街の地域、海の地域に分けて考えてみる事にした。

山の地域は、山口・塩瀬地域、甲山地域、の 2 地域。

街の地域は、甲東地域、広田・夙川グリーンベルト地域、西宮・津門地域の 3 地域。

海の地域は、瓦木・甲子園・鳴尾地域、海岸通地域の 2 地域。

そしてこの 8 地域で、それぞれの地域に合った＜まちづくりコンセプト＞を開発することする。

Ⅱ 各地域の遺伝子候補

私たちは、まず手始めに各地区の遺伝子探しを始めた。

＜西宮北口特区＞

現在開発進行中であり、われわれの認識は大型の＜KAISON 開発地区＞第一号である。今進行中の開発コンセプトが地区の遺伝子となっていくであろう。そういう意味で西宮市の核となすべきこの地区の遺伝子作りは重要である。

＜山口・塩瀬地域＞

７世紀初頭、有馬温泉発見以来温泉地へ通じる功地山の入り口として発展してきた。明治 22 年（1889 年）有馬郡の名来、下山口、上山口、中野、船坂の５か村が合併し山口村となり、昭和 26 年に西宮市と合併した。

船坂：有馬への街道として秀吉が拓いたと伝えられている。生瀬から大多田川に入り、蓬莱峡から七曲がり坂を経て船坂と道は険しく裏道として利用されたようだ。また、三田から西宮への間道。

船坂の寒天：明治 15 年ごろから戦前まで 10 数軒の工場があった。主として糸寒天で和菓子や医療用に使われていた。平成 10 年最後の工場が閉業した。

公智神社：秋祭り、各町内から７台のだんじりが出る。１台づつ神社の坂道を駆け上るさまは勇壮。山口の氏神さまで広田神社とともに平安時代の延喜式に言及がある。
蓬莱峡：50～60 万年前に隆起して出来た景勝地。江戸時代の貝原益軒『有馬温泉記』に剣岩、大剣、小剣などと描写紹介されている。黒澤明監督・隠し砦の三悪人・の舞台になった。

塩瀬：古代から有馬へ通う宿場町として開けた生瀬と、江戸時代になって製紙業と蘭学塾で有名になった名塩とが合併した町である。
生瀬：宿場町、摂津平野から有馬温泉へまた、播州路、丹波路に通ずる追分で交通の要地。江戸早期から宿場が置かれ参勤交代やそれに伴う幕府御用達や一般諸荷物の中継所として栄えた。妻入り建築または宿造りとよばれる家並みが残っている。
名塩の蘭学塾：緒方洪庵の適塾出身伊藤慎蔵が洋学塾を指導開設した。洪庵夫人が名塩出身で、夫人の世話で名塩の娘と結婚。嫁の病気で名塩に住むことになり義父億川百記（洪庵の兄弟子）の世話で開講した。
名塩の紙漉き：古くから山の資源と水の資源と生かして生産されてきたが、今は廃れている。
武庫川渓谷：旧福知山線生瀬～武田尾間、5km 枕木がつづく道 6 ヶ所のトンネルと溝滝、重次郎が渕、高座岩、漆が渕、米が渕と呼ばれる渓谷。水上勉著・桜守のモデル・笹部新太郎氏の桜園がある。

＜甲山地域＞
　この地区は、西宮のシンボル甲山の傾斜地の広がる自然豊かな住宅地で、鷲林寺、北山緑化植物園、北山貯水池、神呪寺と続き甲山森林公園から仁川に至るグリーンベルト地帯である。
鷲林寺、神呪寺ともに 800 年代初期に建立された名刹。甲山周辺には五ヶ山古墳群をはじめ甲山湿原、北山貯水池には水鳥、野鳥も多く大阪湾遠景など、ハイキング、散策に、憩いの場として親しまれている。
　神呪寺、鷲林寺ともに 800 年代初期に建立された名刹。神呪寺は、除夜の鐘、初日の出、初詣と大晦日から元旦にかけて、多くの人で賑わう。本尊は、河内長野の歓心寺、奈良の室生寺の如意輪観音とあわせ平安時代初期の名作三如意輪観音といわれ重要文化財に指定されている。鷲林寺は、833 年弘法大師により創建。鎌倉・室町時代には 76 の宿坊があって＜西の高野山＞と呼ばれていた。弘法大師の刻んだ十一面観音を安置し、鷲を祀って建立した。寺内七重の塔は、市内最古の石造遺品である。戦国時代に信長の焼き討ちに遭い滅んだが、鷲林

寺の僧侶達は、有馬へ行って宿坊を経営するようになった。その名残で有馬温泉に中の坊、奥の坊といった名前の宿が存在している。
　40 年くらい前までは、お盆に送り火をしていました。地元の若衆が松明に火を点けて送り火をすると五月山（池田市）の方からも送り返してきた。残念ながら今はもう行なわれていないが、なぜなのか。
この地域に渋柿の木が沢山ある。昔灘五郷で木綿の荒い布に柿の汁を塗って渋染めにしたもので酒を絞っていた。青い渋柿を灘に卸して現金収入を得ていたそうである。丹波の杜氏たちは、有馬、船坂を越えて鷲林寺へそして今津、西宮の酒蔵への出稼ぎの道であった。渋柿今では＜渋柿石鹸＞加齢臭にきくとのこと。工芸品、料理などにも利用されている。

＜甲東地域＞
　甲東地区は、上ヶ原台地（仁川、上ヶ原、上甲東園）と武庫平野の一部（段上、大市、門戸、神呪、樋之口）から構成される地域。この地域の歴史は古く、上ヶ原台地では、弥生時代の遺跡や 7 世紀ごろの古墳が多く見つかっている。
　上ヶ原台地の開発は江戸時代になって本格化、尼崎藩主青山幸利が 1646 年に開拓に取り掛かった。水源は仁川であるが、大市庄（おいちのしょう）が利用していたし、社家郷（しゃけごう）村が取水していたので水量は多くない。そこで、社家郷村のために溜め池を３つ作り、湯の口での取水を減量して、下流の水量を増やした。こうして出来たのが、目神山大池（後の神原大池、甲陽大池）と岩ヶ谷池（後の新池・上池、下池）である。甲陽大池は、一部埋め立てて甲陽園小学校、残りはトンボの生息地として知られている。新池の上池は、市立西宮高校、下池は、野鳥の浮島と釣りデッキが作られている。関連する五ヶ池は、上池がボート場、下池は、テニスコートになっている。
　なお、これらの溜め池は縮小されたものの現在もその機能を果たしている。
　この話しは、壮絶な水争いの末に出来上がったものである。

上ヶ原用水：上ヶ原台地に水を引くために、仁川を遡り台地と同じくらいの高さから樋を使って取水をした。現在の仁川古墳公園の近くにある、大井滝から８００m の距離を竹製の樋や溝を掘って水引の工事をした。こうして 1653 年、上ヶ原新田が開発出来たのである。竹樋は大雨ごとに破壊される。1774 年の大雨で決定的なダメージをうけて、仁川の壁面の岩盤に、長さ７０間（126m）高さ３尺５寸（106cm）幅１尺８寸（55cm）の用水路トンネルを掘った。着工後３８年、1802 年現在の上ヶ原用水路が完成した。200 年経った今も、大井滝から地すべり資料館のホタル護岸を経由して、関西学院の馬術部厩舎裏の分水樋

まで絶え間なく流れている。
分水樋：この水配分は藩主青山幸成の裁定で上ヶ原 7 割、大市庄 3 割と決まった。この時点で大市庄のうち門戸、神呪に配水されなかった。その後 1856 年、溜め池五ヶ池を掘ることになり、上池を大市庄五ヶ村と上ヶ原、下池を門戸と神呪が担当して普請した。その功績で配水される事になった。
　用水を堰き止めた板の切り込みの長さ、上ヶ原・大市庄 3 尺 6 寸 2 分（110cm）、門戸 5 寸 6 分（17cm）、神呪 6 寸 6 分（20cm）として、それぞれ 74.8%、11.6%、13.6%とした。分水樋完成が 1857 年、以来 150 年余変わらず今も水の配分は行われている。上ヶ原に流れる用水路は＜大川＞と呼ばれ、これから取水する権利のある田畑は順に、一番割、二番割～十二番割まであった。現在の上ヶ原一番町・・・・・に対応。十一番割は上ヶ原山田町、十二番割は上ヶ原山手町になっている。

上ヶ原八幡神社、甲東梅林などがある。

文教地区：下大市には文政年間（1818～30 年）に寺子屋があった。明治政府により学校制度が明治 5 年に発布され、翌 6 年 1 月には門戸小学校（現甲東小学校）が設立された。昭和初期から関西学院、神戸女学院、聖和大学、戦後には報徳学園、県立西宮高校、仁川学院が設立された。
　上ヶ原地区は昭和 33 年に全国 2 番目に＜文教地区＞に指定された。
　昭和 38 年市が文教住宅都市宣言をしている。

門戸厄神、腹切地蔵、永福寺など旧い寺院が多い。

水路：この地域は、水路の多いまちと言われている。上ヶ原用水、山之井、百間樋用水、これらから枝分かれした水路が縦横に流れている。この水路には数々のドラマがあった。また、維持管理を怠れば、ゴミがたまって使い物にならなくなったり、大雨には洪水の心配もある。現在、百間樋には専従の管理者がいて、大雨、渇水時には樋門の開閉や水路のゴミ掃除、砂さらえなど目を離すときが無いそうである。水路は農作物を潤し、植物、魚、昆虫を育て生態系の保存に役立っている。また、街の乾燥や暑さを和らげ、防災にもなる。
　都市の近代化でこのような水路が暗渠化されることの多い中、残された水路を大切にしたいものである。

＜広田・夙川グリーンベルト地域＞
　広田神社は大和朝廷時代は、百済と新羅が争うなか、日本は百済と友好関係

にあって支援していた。神功皇后が摂生元年（201 年）新羅へ遠征の帰途、難波を目指していたが船が進まず占うと、天照大神が＜わが荒魂を広田国に居らしめよ＞との託宣を受けた。この地に広田神社を創設、天照大神を奉った。官幣大社として栄え、その由緒と格式の高さは棟の上に並べられた鰹木 7 本からもうかがえる。（伊勢神宮：10 本、伊勢外宮：9 本、出雲大社：3 本）

津門の港は、百済の渡来人などによる大陸文化の伝承の拠点として重要な役割を果たした。

神社境内から裏山に向かう遊歩道脇に、江戸時代に水路工事を成功させた中村治部紋左衛門の功績を称えた石碑＜兜麓底績碑＞がある。1641 年家光の時代に社家郷、越水、中村、西宮一帯が大干ばつに見舞われた。当時この地域の所有地である社家郷山に降った雨水は仁川に流れ込み武庫川に合流していた。

所有地に降った雨は、その地域のものとの考えで相当の騒動があったが、現在の甲山高校の裏に、難工事の末６０m に及ぶトンネルを掘って仁川から取水した。1643 年に完成している。水路は今も流れ上水道の一部としても活用されている。

夙川グリーンベルト

夙川河川敷公園は、渓流に沿う夙川上流緑道によって北山ダム公園と結ばれている。下流へは川尻の御前浜とは、夙川さくら道、夙川オアシス道で結ばれ、夙川は、広田神社の森林地帯を抱き込んで一本の長いグリーンベルトとなって都市の肺の役割を果たしている。夙川の起点となる銀水橋には、水分堰堤と水分樋門があり樋門の水は山地の田畑を潤し、北夙川橋付近で再び夙川に戻る。銀水橋西詰めの樹林は、清流の淵に臨み研究者たちに高く評価されている手付かずの自然林がある。川尻の御前浜は、東は砲台あたりから、西は堀切川樋門まで東西約 1 キロ、広さ 5,7 ヘクタールの砂浜である。冬鳥のヒドリガモ、ホシハジロなどをはじめ、カモ、カモメなどの休息地になっている。

干潟には春と秋に、シギやチドリが渡ってくる。ユリカモメは、カムチャッカから来るのもいて、年間約 35 種類の鳥類の姿が見られる。

また、川沿いには辰馬考古資料館、西宮市大谷記念美術館、西宮市中央図書館、郷土資料館、市民ギャラリー、菊池貝類記念館などがある。

＜西宮・津門地域＞

西宮は、平安時代は広田神社あたりまでが入海であった。入海の真ん中に小さな島があった。現在の市役所あたりである。入海には夙川と東川が流れ込み、平安末期ごろから埋まりはじめまる。あまりに氾濫する夙川は、鎌倉時代に現在の大井手町北側から東南に流れていたが、まっすぐ南に流れるよう付替えら

れた。その後、入海は湿地帯となっていった。それにより古くから栄えた津門の港はその機能を失い、新しい港今津が南に築かれた。

入海が埋まることにより、海沿いの漁師町が栄え始め、漁師が奉る戎神社が賑わいを見せる。そこが今の本町あたりで、以前栄えた津門から見ると西の戎神社、西にある宮、＜西宮＞地名の由来と言われている。鎌倉から室町時代にかけて、神社周辺に門前町が出来、市場（市庭町）も出来た。西宮の酒、御前浜の鯛、などの産物も商業町を有名にした。

その上、西国街道が広田神社から南へ降りて与古道から神社赤門前につくという街道の変化もあり大いに栄えた。

石在町・宮水：約 30 の井戸場に 70 余の井戸が掘られ、水量 50～70 万トンで、そのうち約 15 万トンが酒の仕込み用水として利用。
鞍掛町（宿場）：西宮宿は、兵庫から 5 里（20 キロ）、尼崎城下へ 2 里で京都、大坂から四国へ通じる街道の交差点、大いに栄えた。西宮宿の街道筋には一般旅行客が宿泊する旅館が６０軒、大名が利用する本陣、脇本陣、荷物継ぎたて義務を取り仕切る問屋場、各種のお触れを掲げる札場などが並んでいた。
戸田町（大坂町奉行所の出張所）：尼崎藩領時代西宮を支配する陣屋がおかれ藩士５名が常駐庶務を担当していた。明和６年（1769 年）幕府直轄領（天領）になると大坂町奉行の勤番所になり与力１、同心５、足軽１が派遣されていた。政治の中心地であった。

津門：津門は古くから豪族が住み、栄えた港町であった。豪族が残した古墳が２つあった。一つは大塚古墳、現アサヒビール工場敷地にあったとされ、津門大塚町として地名に残っている。もう一つは稲荷山古墳で、津門稲荷町辺りにあったようである。大塚古墳の石室の一部が津門神社に残っている。

＜瓦木・甲子園・鳴尾地域＞

瓦木地区は、明治 22 年町村制実施のとき高木、荒木新田、上新田、中新田、上瓦林、下新田、瓦林、下瓦林の 8 村で瓦木村を形成した。

寛永 13 年（1636 年）尼崎藩主青山幸成により始まった新田開発は、武庫川西岸に沿った荒地の開墾に着手した。まず灌漑用水として新堀川掘削を指示した。この新堀川は武庫川の伏流水が湧き出る鯨池を水源としている。この開発で上瓦林、下瓦林の開墾は進み、寛永 14 年から開発した助兵衛新田（後に上新田）と久右衛門新田（後に下新田）、5 年後に五良右衛門新田（後に中新田）の用水になり一部瓦林地域の用水になっている。

近年まで田畑が広がっていたが、大正 9 年（1920 年）西宮北口駅、昭和 9 年

（1934 年）に甲子園口駅が開設され、商業地や住宅地として変容してきた街である。
　今後西宮北口の開発により大きく変わる可能性がある。

岡本家：岡本家は 150 年間に亘り、この地域 20 余ヶ村の庄屋、大庄屋を務めた豪農である。岡本家が残した江戸時代の尼崎藩全域（尼崎―須磨間）の政治、生活に関する貴重な資料が約 4 万点、西宮市の重要文化財に指定されている。

　鳴尾＜なるお＞の起源は約 1800 年前、広田神社創建のころと言われ、平安時代の歌や室町時代の謡いにもよまれている。しかし現在の鳴尾地区は、万治 2 年（1659 年）の＜戸崎切れ＞と呼ばれる武庫川・枝川からの大洪水によって全村流失の災害が発生した。この洪水で当時の旧街道付近（里中町、上鳴尾町、甲子園六番町、甲子園七番町）以北に点在していた集落すべてが流されたと伝えられている。流れ込んだ土砂の量は、現在の海岸線近くまでが陸地または浅瀬になった。正徳元年（1711 年）洪水から 50 年後に開始された、上田新田の開拓にはじまり、明治 19 年（1886 年）の干ばつによる難民救済埋立工事で完成した前浜開拓まで、176 年間に及ぶ鳴尾の新田開拓の歴史である。
鳴尾義民碑：砂地の多い鳴尾にとって水は命に代わるものであった。天正北郷樋事件は鳴尾にとって忘れられない歴史である。1557 年武庫川から枝川が分流し通過する瓦林村では、村を水害から守るため堤防を築いた。下流の鳴尾村では、武庫川の伏流水などを水源にした灌漑用水路を整備していたが、築堤で水路が遮断されてしまった。話し合いで両村の利害を調整して枝川の川底に樋を設置していたが、簡単な樋では梅雨時になると破損する。3 年間ほどの水不足が続き、鳴尾村では、雨乞いをしたり、青々と稲が育つ瓦林村に水を分けてほしいと頼んだが、水は大事と断られた。水を盗むのは悪いことであり、お上に知れると死罪である。長老たちは家族のことを思い悩んだ。しかし、村の命運が掛かっている＜やろう、やるしかない＞と決議した。
　その夜から鍬やモッコをもって集り、下瓦林の用水（現新堀川）から水をとるために、北郷公園から枝川の川底の下にトンネルを掘り、四斗樽の底を抜いたものをつないで並べた。これに対して瓦林側は、水不足と堤防の破損を恐れ実力阻止にでた。これが発端となり両村の村民が付近の村々の応援も得て、大争乱となり多数の死者を出すに至った。この騒動は豊臣に訴えられ、豊臣奉行衆の裁定で、鳴尾村の水利権を認めた。裁判にあたった片桐且元は、自首してきた村民に対し＜水が欲しいか、命が欲しいか＞と尋ねたところ、迷わず水が欲しいと答えた。そこで且元が、樽の個数と同数の者を死刑にするが樽は何個かと聞き、村民が 20 とちょっとと答えると＜よし、25 人打ち首＞と裁定した。

樽は 100 以上使わなくては届くはずがない。且元も承知の上だったと。
　同時に騒動を起こしたとして、瓦林村 26 名も鳴尾 25 名と一緒に大坂で処刑された。昭和 15 年（1940 年）北郷公園に義民碑が建てられ農民の水への思いを今に伝えている。
　甲子園開拓で、枝川、申川廃川工事の折北郷の暗渠に使った資材が川底から掘り出された。それは四斗樽ではなく、立派な楠材であった。義民碑の東側に溝があり、暗渠の名残をのこしている。
鳴尾の農業と特産品：鳴尾の農業は他村と同じく稲作であった。しかし土地の多くが砂地で、より多くの水が必要であった。貴重な農業用水をめぐる、天正の鳴尾義民、北川用水など歴史に残る水争いがたびたび起きた。ところが戸崎切れの大災害以降、稲作から綿中心に一変した。その後灯油の原料となる菜種つくりが盛んになったが、電灯の普及で廃れてしまった。＜なるおに過ぎし寺スイカ＞と古くから鳴尾に伝わっています。スイカは砂地と日当たりの良さで特産品となり、イチゴも大正から昭和のはじめにかけて栽培が盛んになり、180 余町歩鳴尾の全農耕地の５０％にも達した。
甲子園の誕生：明治以降、近代産業の成長や貿易の拡大により、大阪と神戸を結ぶ従来の国道（旧中国街道）に代わる道路建設が課題であった。この国道は大正 8 年（1919 年）現 2 号線として建設されたが、当時の土木技術水準から見ても、また費用の点でも武庫川改修と架橋が問題であった。さらに、大阪、神戸、阪神間の新興都市住民の要求に応えた大規模レクリェーション施設が求められていた。これらを一挙に解決する妙案として洪水の元凶、枝川と申川を廃川処分し、そこに生まれる新しい土地を売却した利益金で武庫川の改修と新国道を建設するというものであった。大正 9 年（1920 年）枝川・申川廃川埋立工事がはじまり大正 12 年（1923 年）に竣工。生まれた土地 22 万 4 千坪。工事費 100 万円を加え 410 万円で阪神電鉄に売却した。阪神電鉄はこの土地を甲子園と命名した。
高須町の変貌：大正 3 年（1914 年）馬券発売が禁止され荒れ放題の競馬場をゴルフ会社を経営していた W･J･ロビンソン氏が借り受けゴルフ場を開いたが、５年程で経営難により閉鎖。鈴木商店（豊年製油）を中心とする関西財界人によってわが国３番目の鳴尾ゴルフ倶楽部が結成された。一時は鳴尾川から武庫川べりにかけて 18 ホールを有する、東洋一のゴルフ場となった。
　同時期（1911 年）競馬場でアメリカ人マースがカーチス複葉機で飛行の妙技を披露した。そして 1914 年、15 年に民間飛行大会が開かれ、日本のヒコーキ野郎の伝統は川西航空機に引き継がれた。その後、川西航空機製造（新明和工業）は工場拡張のため土地を買収したため、鳴尾ゴルフ倶楽部は昭和 14 年（1939 年）、猪名川上流に移った。

鳴尾運動場：阪神電鉄が休止中の競馬場に運動場を作ったのは大正 5 年（1916 年）である。翌 6 年豊中グランドから第 3 回全国中等学校野球大会を誘致し、以降甲子園へ舞台が移る大正 12 年（1923 年）まで開催された。なお、運動場は、野球場が 2 面、400mの堀を利用したプール、800m のトラックなど持て余すほどの広さがあった。運動場は大正 13 年（1924 年）甲子園球場の開場で閉鎖された。

＜海岸通り地域＞

東から鳴尾浜地区、甲子園浜（浜地区・沖地区）、西宮浜、と今津浜、御前浜

の地域とする。今津浜と御前浜は歴史海岸としてそれぞれの隣接する町と密着した物語を持っている。その他の浜は、新しく開発された地域で今後どのような発展をするのか。また、どう発展させるのかという地域である。

現在感じている事は、それぞれの浜に等分に仕掛けがしてあって全体（海岸通り）として何を訴えているのか解らない。海岸通りの物語をつくる必要がある。

MEMO：食べ物、どんなファッションで出かける、どの時間帯がいいの、
見るもの、観るもの、魅せるものなあに、なにするの、だれが、

Ⅲ 8 地区のまちづくりコンセプト＜理念＞

山口・塩瀬地域―理念：自然と歴史・伝統をつなぎ、知を育む暮らし
船坂の寒天。名塩の製紙。億川百記・緒方洪庵・夫人・伊藤慎蔵の残像。武庫川渓谷・笹部新太郎桜園整備。など

甲山地域―理念：自然と伝統を守り、風土を大切にする暮らし
鷲林寺（坊料理・送り火）。ハイキングの起点（駐車場）として仁川・夙川両コースに中コースあわせて？コース。

甲東地域―理念：伝統を大切にし、知的で豊かな暮らし
上ヶ原用水の活用で仕掛けづくり。学校の地域参加。エコロジータウン宣言。※10 月 14 日・歴史用水国際シンポ・金沢。

夙川・広田地域―理念：自然環境に誇りを持ち、市のガーデンタウンを目指す

未来都市の住宅地として益々の進化。夙川河川公園と一体化した庭園地区。地域コミュニケーションの復活。共助の精神。

西宮・津門地域―理念：郷土文化を大切にし、誇りある生活を楽しむ
宮水商品の開発。津門の港の残像・起源へのスポットライト
戎さんの行事。（祇園祭りは３ヶ月）

瓦木・甲子園・鳴尾地域―理念：先進性・冒険性・創造性を育む、情報発信基地
イチゴ、スイカ、びわの復活。スイーツタウン宣言。
野球、ゴルフ、競馬、飛行機、＝活動的＝地域の遺伝子

海岸通り地域―理念：光かがやくオシャレなファッションステージ
海、砂浜、ヨット、光、ブルー＆ホワイト、デザイン
癒し、やすらぎ、オシャレ、ときめき…いい食事。

西宮北口特区―理念：西宮市のシンボル、人を引き付ける求心性、文化の発信性

Ⅳ 勝手に KAISON 企画の開発例

山口、塩瀬地域のエリア・コンセプト例

この地域は、高速道路の開通により、急速に変貌している街である。古代三田方面・西宮方面への街道拠点として栄え、また学業のまちとしての歴史を大事にしたい。

この地区の住民が、この街に期待する＜生きがい＞を５つに分類した
１、　教養を高めたい
２、　自然を楽しみたい
３、　歴史と伝統を大切にしたい
４、　良い環境に暮らしたい
５、　逃避したい
これらを、ひとつの言葉にまとめて＜街の理念＞とします

街の理念……＜風土の中の人間の街＞です
補：自然と歴史・伝統をつなぎ、知を育む暮らし

この理念を実現するための、素敵な生活の仕方を 10 通り見つけます。
（このテーマとして見つけた 10 の生活は、街の歴史、伝統に立脚しています。そして、今後の社会を洞察した新しい提案が入っています）
１、人生を楽しむ生活　２、社会から逃避する生活　３、社会に参加する生活
４、文化を楽しむ生活　５、催事を楽しむ生活　６、仲間と集る生活
７、趣味を楽しむ生活　８、自然を楽しむ生活　９、環境を大切にする生活
10、歴史と伝統を大切にする生活

理念を達成するために必要な施設：都市農業開発
目指す地区のイメージ

甲山地域のまちづくりコンセプト例

甲山地域は、古い歴史を秘めた緑豊かな地域である。緑を生かした産業の復活、歴史・文化の再発見、自然に親しむハイキングなど、自然を生かした中での開発が望ましい。

この地区の住民がこの街に期待する＜生きがい＞を、５つに分類した
１、　自然を大切にしたい
２、　良い環境に住みたい
３、　伝統を大切にしたい
４、　安定した老後を過ごしたい
５、　余暇を楽しみたい
これらを、ひとつの言葉にまとめて＜まちの理念＞とします

街の理念……＜すてきな暮らしを楽しむ＞です
補：自然と伝統を守り、風土を大切にする暮らし
この理念を実現するために、育ってくると思われる、10 の生活を見つけます
（このテーマとして見つけた 10 の生活は、街の歴史、伝統に立脚しています
そして、今後の社会を洞察した新しい提案が入っています）
１、自然を大切にする生活　２、遠出の散歩を楽しむ生活　３、人生を楽しむ

生活　４、ホームメーキングをする生活　５、社会に奉仕する生活　６、老後を楽しむ生活　７、ランドマーク地区の誇りをもつ生活　８、歴史と伝統を大切にする生活　９、文化を楽しむ生活　10、飲食を楽しむ生活

必要な施設：送り火の復活。坊料理の復活。ハイキングコースの基地づくり。
　　外庭づくり。新鮮野菜（地産地消）の充実。
出来上がる地区のイメージ：

甲東地区のまちづくりコンセプト例

　甲東地区は、水の乏しい地域で、古くから用水を縦横に開削して農用地としてきた歴史から、水路の多いまちであり、自然の生態系が濃く残っている。この水路を新たな視点で生かすべきであり、官学共同で本格的に生態系保存の試みを考える時がきている。丁度今年 10 月名古屋で、＜生物多様性条約第 10 回締約国会議＞COP10 が開催される。条約は 1992 年に締結されました。世界 193 カ国が参加、世界の注目を集めている会議である。この機会に、街なかに生態系を育てるエコロジー都市一番乗りは、素敵なことかも知れない。

この地区の住民がこの街に期待する＜生きがい＞を、５つに分類した
１、　教養を高めたい
２、　伝統を大切にしたい
３、　自分を大切にしたい
４、　自然を楽しみたい
５、　余暇を楽しみたい
これらの言葉をひとつにまとめて＜まちの理念＞とします

街の理念‥‥‥＜伝統を大切にし、知的で豊かな暮らし＞です

この理念を実現するための、素敵な生活を 10 通り見つけます
（このテーマで見つけた 10 の生活は、街の歴史、伝統に立脚しています。
そして、今後の社会を洞察した新しい提案が入っています）
１、自然を大切にする生活　２、自分を大切にする生活　３、逃避する生活
４、趣味を楽しむ生活　５、道具を揃える生活　６、学校に通う生活

７、観劇･鑑賞を楽しむ生活　８、発表をする生活　９、散歩をする生活
10、社会に奉仕する生活

必要な施設：街なかビオトープ（水路の活用）。エコロジーな街宣言
　　大学の地域活動への参加。
地区のイメージ：

広田･夙川地域のまちづくりコンセプト例

　この地域は旧い歴史と豊かな緑に培われた阪神間随一の住宅地となっている。今後は、新しい未来の理想の住宅地として発展する可能性を秘めている。

住民がこの街に期待する＜生きがい＞を、５つに分類した
１、　　余暇を楽しみたい
２、　　教養を高めたい
３、　　歴史と伝統を大切にしたい
４、　　安定した老後を送りたい
５、　　良い環境に住みたい

これらを、ひとつの言葉にまとめて＜まちの理念＞とします

　　街の理念･･････＜人間らしく生きる街＞です
　　補：自然環境に誇りを持ち、未来都市ガーデンタウンを目指す

この理念を実現するための、素敵な生活の仕方を、10 通り見つけます
（このテーマで見つけた 10 の生活は、街の歴史、伝統に立脚しています。
そして、今後の社会を洞察した新しい提案が入っています）
１、人生を楽しむ生活　２、合理的に暮らす生活　３、催事を楽しむ生活
４、仲間が集る生活　５、スポーツを楽しむ生活　６、趣味を楽しむ生活
７、自然を楽しむ生活　８、文化を楽しむ生活　９、教養を高める生活
10、ホームメーキングをする生活

必要な施設：未来街を考える
河川公園と住宅街の一体化案の検討。グリーンベルト全体の街化。
共助キャンペーン、外庭キャンペーン、共有施設など
地区のイメージ：

西宮・津門地域のエリア・コンセプト例

西宮は、尼崎藩時代は陣屋がおかれ、明和６年（1769 年）天領になり大坂町奉行の勤番所が出来て、政治の中心地であった。現在も市役所が置かれ、行政の中心となっている。

住民がこの街に期待する＜生きがい＞を、５つに分類した。
１、　歴史と伝統を大切にしたい
２、　文化を楽しみたい
３、　流行をとり入れたい
４、　社会に奉仕したい
５、　教養を高めたい
これらをひとつの言葉にまとめて＜街の理念＞とします

街の理念･･････＜郷土の文化を育む街＞です
補：郷土文化を大切にし、誇りある生活を楽しむ
この理念を実現するために、育ってくると思われる、10 の生活を見つけます。（理念をテーマとして見つけた 10 の生活は､街の歴史､伝統に立脚しています。そして、今後の社会を洞察した新しい提案が入っています）
１、歳時を楽しむ生活　２、文化を楽しむ生活　３、流行をとり入れる生活
４、情報を集める生活　５、観劇、鑑賞をする生活　６、教養を高める生活
７、仲間が集る生活　８、合理的に買う生活　９、街を歩く生活
10、社会に奉仕する生活

必要な設備：津門の港の残像・起源地のクローズアップ。戎さんの行事（祇園は３ヶ月）。宮水商品開発。
出来上がる地区のイメージ

瓦木・甲子園・鳴尾地区エリア・コンセプト例

洪水と埋め立てを繰り返してきた海辺の地域で、近年の開発で大きく様変わりした。大正ロマンの残る町、住宅化しているが再開発の要請もあり、地域の遺伝子を生かした発想が望まれる。

この地区の住民が、この街に期待する＜生きがい＞を、5 つに分類した。
１、　ロマンを大切にしたい
２、　個性を育てたい
３、　流行に参加したい
４、　教養を高めたい
５、　余暇を大切にしたい
これらを、ひとつの言葉にまとめて＜まちの理念＞とします。

街の理念……＜すてきな暮らしを、見つける街＞です。
補：先進性、冒険性、創造性、情報発信基地
この理念を実現するための、すてきな生活の仕方を、10 通り見つけます。
（このテーマとして見つけた 10 の生活は、街の歴史、伝統に立脚しています。そして、今後の社会を洞察した新しい提案が入っています。）
１、　ロマンを大切にする生活　２、グルメを楽しむ生活　３、旅行・スポーツを楽しむ生活　４、仲間と集る生活　５、文化を楽しむ生活　６、教養を高める生活　7、個性を育てる生活　８、伝統を大切にする生活　９、流行をとり入れる生活　10、情報をあつめる生活

必要な施設：イチゴ、スイカ、都市農業の復活。スイーツタウン宣言。　野球、ゴルフ、飛行機、馬･･･活動的。　自転車、ランニング、ストレッチ公園
地区のイメージ

海岸通り地域のエリア・コンセプト例

この地区は、西宮市の中で開発が遅れていた地区である。ヨットハーバーを中

心に、これからどのような街が出来るのか。そしてその街が将来、西宮市でどんな役割を果たすのか期待の多い地区である。

いま住民がこの街に期待する＜生きがい＞を、５つに分類しした。
１、　ロマンを大切にしたい
２、　創造を楽しみたい
３、　冒険をしたい
４、　良い環境に住みたい
５、　流行をとり入れたい
これらを、ひとつの言葉にまとめて＜まちの理念＞とします。

街の理念……＜ファッショナブルな街＞です。
補：光かがやくオシャレなファション･ステージ
この理念を実現するための、素敵な生活の仕方を、10 通り見つけます。
（このテーマとして見つけた 10 の生活は、街の歴史、伝統に立脚しています。そして、今後の社会を洞察した新しい提案が入っています。）
１、刺激を楽しむ生活　２、自分を顕示する生活　３、飲食を楽しむ生活
４、催事を楽しむ生活　５、仲間と集る生活　　６、街を歩く生活
７、ショッピングを楽しむ生活　８、流行のものを持つ生活
９、情報を集める生活　10、ロマンを大切にする生活

必要な施設：長いデッキの散歩道、語らいのある公園、海、砂浜、ヨット、
ハーバーの音、光、ホワイト＆ブルー、風を感じる（風車）、
デザイン、癒し、やすらぎ、トキメキ、屋台店･････いい食事
地区のイメージ：文化的、親しみのある、流行の、オシャレな、賑やかな

西宮北口特区のまちづくりコンセプト例

新たな西宮市の中心にふさわしい遺伝子の創造が必要である。

住民がこのまちに期待する＜生きがい＞を、５つに分類した
１、　自己顕示したい

２、　仲間を大切にしたい
３、　流行に参加したい
４、　教養を高めたい
５、　個性を育てたい
これらの言葉をひとつにまとめて＜まちの理念＞とします。

街の理念‥‥‥＜新しい文化と出会う街＞です

この理念を実現するための、素敵な生活の仕方を、10 通り見つけます
１、文化を楽しむ生活　２、発表する生活　３、観劇、鑑賞する生活
４、街を歩く生活　５、仲間と集る生活　６、流行をとり入れる生活
７、情報を集める生活　８、伝統を楽しむ生活　９、個性を楽しむ生活
10、趣味を楽しむ生活
この街に関してはこの 10 通りの生活から更に 10 通りの生活を見つけ 100 通りの生活を見つける作業が必要である。

必要な施設
この地区のイメージ

あとがき

我々は昨年＜畿のくに＞構想を一冊の冊子にまとめた。折しも西宮市のまちづくりコンセプトを提案することになった。その冊子に込められた理念を西宮市に当てはめる、という格好の機会であった。

西宮市は神戸と大阪の中間にあり、単なる交通の通過点、大阪の近郊ベッドタウンと一般には捉えられがちである。しかし地理的、歴史的に実に多様な興味深い地域であることがわかって、改めて西宮市を見つめ直すこととなった。

＜畿のくに＞に述べているホロンという概念は最小限自給自足の出来る単位ととることが出来る。では西宮市は＜畿のくに＞におけるホロンと見なせるのか、という問題に突き当たる。現在の西宮市は阪神地区の中のひとつのポリスとして捉えられる。たぶん住民意識もそうだろうと思える。しかし、港湾、街道の物流拠点の役割を果たしてきた歴史的西宮今津地域を中心として、山口地区まで含めた現在の自然豊かな広域な行政区域をみると、大都市近郊のユニークなホロンとして成熟する可能性を秘めていると我々は診た。そして出来上がったのがこの《KAISON 企画》である。

しかし、もう少し詰めておかねばならないこと、具体的な提案不足など、未完の状態である。しかし、この冊子を西宮市の基本コンセプトと捉え、各地域の住民が、具体化し、実践していくための手引き書には充分なりうるものと考える。この《KAISON 企画》が西宮市の行政に参照され、市民にとって住み良い、誇りある市に進化にしていくことに、いくらかでも寄与できれば、故中尾氏をはじめ我々の望外の幸せである。

この《KAISON 企画》の構想、８つの地域分けのアイデアなどはほとんど故中尾氏の創案によるものでることを特に記す。

２０１０年９月末日
ＣＶＶまちづくりグループ
故中尾順二
赤尾宏
磯村幹夫
岩本樹雄
櫻井義行
谷平 勉
村上正